
国際学会報告

第8回国際中世哲学会

野 町 啓

第8回国際中世哲学会は、1987年8月24—29日、フィンランドのヘルシンキ大学をメイン会場として、“Knowledge and the Sciences in Medieval Philosophy”のテーマのもとに開催された。日本からの参加者は、九大稲垣、早稲田小山、慶応大出、南山長倉、滞独中の和歌山大八巻、聖心 Goessmann、山崎、学振研究員金井、筆者の9人であり、このうち Goessmann、長倉、山崎の三氏が、それぞれ、Hildegard von Bingen、Bonaventura、Anselmus について発表を行った。このように、日本からの参加者は、Louvain-la-Neuve で行われた前回に比べ、名前を挙げるのが煩わしくないほどの少人数であった。

会議は、ヴィトゲンシュタインとの親交で知られ、ケムブリッジにおける彼の後継者でもあった G. H. v. Wright の “Dante between Ulysses and Faust” と題するオープニングレクチャーに始まり、四つの個別のテーマによる全体会議、セッションに別れての研究発表、また、前回と同様、若手研究者を中心とするテキストの校訂、コンピューターによる文献処理等、研究上の情報交換とでもいうべきコミッションの構成がとられていた。

今回の学会の特色を最もよく示しているのは、次に掲げるような四つの全体会議のテーマであろう。1. Tullio Gregory: *Forme de la connaissance et ideaux de savoir dans la culture médiévale*; Jakko Hintikka: *Concepts of Scientific Method from Aristotle to Newton*, 2. M. E. Marmura: *The Fortuna of the Posterior Analytics in the Arabic Middle Ages*; L. M. De Rijk: *The Posterior Analytics in the Latin West*, 3. W. Stözewski: *Metaphysics as a Science*, 4. A. de Libera: *Le développement de nouveaux instruments conceptuels et leur utilisation dans la philosophie de la nature*. さらにこれに加えて、8月26日、会場をフィンランド最古の都市トゥル

ク (オーヴォ) の大学に移し、会長の J. Murdoch を司会者として、シンポジウムが行われた。その題目は、“Theoretical and practical Autonomy of Philosophy as a Discipline in the Middle Ages”であり、提題者は、L. Bnakis (Die theoretische und praktische Autonomie der Philosophie als Fachdisziplin in Byzanz), H. Daiber (The Autonomy of Philosophy in Islam), C. Sirat (Le Corpus des sciences selon les philosophes juifs du Moyen-Âge), J. Marenbon (The Theoretical and Practical Autonomy of Philosophy as a Discipline in the Middle Ages: Latin Philosophy, 1350-1400)であった。

今回の大会の詳細とその成果は、いずれ刊行されるであろう Actes によるほかない (ちなみに前回のそれは、*Philosophes Médiévaux*, t. XXVI として、〈L' Homme et son univers au Moyen Âges〉のタイトルで、C. Wenin をエディターとして1986年出版されている)。筆者は、すべての部門に参加したわけではなく、ここで学会の全容を述べ尽くすことは不可能である。ただ全体の印象としては、以上に挙げた発表者やテーマからうかがえるように、中世における〈Science〉の位置づけとその方法論の検討に重点が置かれていたように考えられる。ただし、‘Science’が「科学」・「学問」(その場合、さらに哲学・神学のいずれを指すか)のどちらを意味するかは、それぞれの発表者により、また場面によりニュアンスが異なり、したがって全体としても必ずしも分明ではない感を受けた。‘Science’は、〈a science〉と単数で呼ばれたり、〈sciences〉と複数で呼ばれたりしていたが、‘Science’というヨーロッパ語自体が持つ言葉としての曖昧さが、はからずもこの学会でも露呈されたように筆者には思われてならなかった。ともあれ前回の学会では、中世における人間とその宇宙が、今回の学会では‘Science’が、それぞれテーマとされたことに、現代において中世の意義が問い直される必然性と局面とが示されているように思われ、興味深いものがあった。

なお今回の学会は、1973年、《The Cultural Context of Medieval Learning》のテーマの下に開催された Colloquium (その Proceedings は *Synthesis Library* の vol. LXXVI として Murdoch の編集で刊行されている) とかなり共通する傾向を持っているといつてよい。実際この Colloquium の中心にいた Murdoch, T. Gregorory, E. D. Sylla, G. Beaujouan は、この大会でも、提題・発表・司会等を行っているのである。こうした特色は、統一テーマからも当然だといえるが、会長が Murdoch であり、Wri-

ght やその後継者 Hintikka が活躍するヘルシンキ大学が会場とされたことにもよるところ多大であるといえよう。また前回との比較でいえば、Louvain-la-Neuve では、筆者もその名前を知っているいわゆる老大家が多数見受けられたが、今回は Verbeke 教授の元気な質問の姿だけが一際印象に残ったほど、何か中世哲学の分野での世代交代が徐々に進んでいるような印象を受けた。さらにヘルシンキの駅や空港、トゥルクの大学でもらった案内に、フィンランド語のほかに「ヘルシングフォルス」、「オーヴォ」といったスウェーデン語の表示が併記されているのを見て、第7回大会後ベルギーを旅行した際、やはり駅名等がフラマン・フランス両語で書かれていたことを思い出し、ヨーロッパにおける言語と民族の複雑な歴史的絡み合いの一面をかいまみた感を深くしたのである。